【24】

氏　名（本　籍）	崔（ちぇ）　在（ぜ）穆（もく）（韓　国）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　甲　第　814　号
学位授与年月日	平成３年３月25日
学位授与の要件	学位規則第５条第１項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	東アジアにおける陽明学の展開

主　査	筑波大学教授	文学博士	高　橋　　進
副　査	筑波大学教授		広　神　　清
副　査	筑波大学教授		奈　良　博　順
副　査	筑波大学助教授	文学博士	堀　池　信　夫

論　文　の　要　旨

本論文は，東アジア三地域（中国，韓国，日本）における陽明学の展開の諸相を究明し，さらにそれを比較論的に考察することを目的としたもので，王陽明以後，三地域においてその思想を継承し，展開することによって，各地域なりの個性ある思想傾向を形成することに重要な役割を果たした陽明学者の思想を研究の対象とする。（地域の呼称については，著者が理由を付してこれを用いているので，そのまま使用する。）具体的には，陽明学の形成・展開において最も特徴ある思想様相とみられる致良知論，万物一体論，人欲論，権道論，三教一致論の五つを取り上げ，これらを考察することによって，本来王陽明の思想に内在していた二つの重要な思想傾向，即ち向内的・静的・反省（精察）的性格としての工夫重視の側面（消極的側面）と，内外的・動的・行為（実践）的性格としての本体重視の側面（積極的側面）が，それぞれの地域においてどのように特徴的に展開するかに注目して論ずる。論文の構成は，序論において，本研究の目的，研究の対象と時代設定の理由，研究の方法等を述べ，次いで全体を６篇24章に分けて論ずる。

第一篇では，陽明学の成立とその思想的特質を論じ，彼の思想に本来的に内在していた本体重視の側面と工夫重視の側面について，その思想的中核としての致良知論を精察することによって特徴的に析出するとともに，この両側面が既に彼の在世当時，王畿，銭徳洪の四句教論にみられるごとく，この学派の中で分裂していたことを指摘する。

第二篇では，陽明学の中核思想たる致良知論の三地域における展開を論じ，中国においては本体重視の積極的側面である現成良知論が主導的に展開し，韓国では工夫重視の消極的側面である良知体用論が受け入れられて展開し，反面，日本においては陽明学受容当初から現成良知論を受容してそれを深めていくとする。著者はこれらの諸特性を，中国では，王畿の「現成良知」論，王艮の「明哲保

身」論，羅汝芳の「赤子之心」論，李贄の「童心」論から解明し，韓国では，崔鳴吉の良知の開悟と工夫論，鄭斉斗の良知体用論と致良知（現成良知論）批判を中心に論ずる。特に，日本陽明学の開祖中江藤樹が，彼の独自に主唱する「畏天命尊徳性」の学（明徳の学）を基盤として，王畿の本体工夫（現成良知）論を受容しそれを深化する過程において，王陽明の現成良知思想を重視して受容し，さらにこの現成良知を，天命を前提とした明徳の学（畏天命尊徳性）と巧みに結合させ，良知に対する不動の信を確立したとする。しかも藤樹は，かかる陽明学の積極的側面を受容深化しながら，極めて静的・反省的な思想を構築し，人欲論にも傾斜しない立場を明示したことを詳細に論ずる。著者によれば，藤樹の良知論は，大塩中斎に受け継がれて「帰太虚」論と結合し，現成良知論本来の動的・行為的性格に復帰したとされる。

第三篇では，陽明学における万物一体論の展開を論ずる。本来，万物一体論は，良知を基底にして形成されたもので，向外的・動的・行為的性格を示す「経世中心の行為的万物一体論」と，向内的・静的・反省的性格を示す「修養中心の反省的万物一体論」とに分かれるとし，中国における最も特徴ある万物一体論は，王艮にみられるような経世中心の万物一体論であるのに対し，韓国では一身の修養を基本とした静的・反省的性格をもった思想となり，日本では経世中心の万物一体論がそれぞれ主導的に展開したことを跡付ける。著者はこの経緯を，中国では王陽明と王艮を，韓国では崔鳴吉と鄭斉斗を，日本では中江藤樹と大塩中斎を取り上げて解明するが，特に中江藤樹に現れる「太虚」「皇上帝」の思想の日本的性格について詳論する。

第四篇では，人欲論の展開を論ずる。本来王陽明は，私欲の克倒を徹底して説く否定論者であったが，彼の思想の継承者がそれを具体的に深化・展開する過程において，私欲の肯定或いは否定の論を生ずるに至ったとし，私欲肯定論は，王陽明思想の本体・行為（実践）強調の側面を，否定論は工夫・反省（省察）重視の立場を継承・深化したものとする。具体的には，中国では梁汝元の寡欲論が孔・孟のそれに回帰すること，及び彼の命によって欲を制し，民と欲を同じくして欲を育てるの論，李贄の無私は画餅とする私ないし私欲肯定の論を解明する。韓国では，許筠の男女の情欲は天とする肯定論がやがて鄭斉斗等によって否定されること，日本においては，中江藤樹の凡心の超克・絶意の論から，大塩中斎の無欲論に至る過程を論ずる。

第五篇では，「権」論の展開を論ずる。王陽明の「権」は，致良知論を根幹としてこれに随伴的に現れる。やがて中国では，王畿や李贄等によって，格法の否定と経即法（史）論，経史一物論が主張され，経の権威の徹底した相対化が図られること，韓国では，崔鳴吉，張維，鄭斉斗等によって「権」は経を補完するものとして位置付けられたこと，然るに日本においては，中江藤樹が，日本という国の特殊性・固有性の自覚に立ち，「時処位」の論を背景として「権即道」論を確立すること，これを継承した熊沢蕃山は，「人情事（時）変)」論「水土」論をもって藤樹の「権即道」論の思想を集成したこと等を，各論ないし比較論によって明確に特徴づける。

第六篇では，陽明学における三教一致論の展開を論ずる。著者はまず，王陽明の三教一致論が良知を基本原理として，良知の学の中に儒・道・仏を統合する形で成立したことを論じ，したがって，良知をどう捉えるかによってこの論は性格を異にしたものに分裂せざるを得ないとし，具体的には，良

知の虚（道）・無（仏）的性格と，有（儒）的性格にそれぞれ重点を置いた展開がみられることを明らかにする。即ち，中国においては，王畿は先師良知の学は「三教之霊枢」といい，李贄は「三教帰儒」の論によって，良知の虚・無的性格を深めた三教一致論を展開し，韓国では，許筠のように老・仏への心酔もみられたが，やがてそれは厳しく批判され，鄭斉斗等による名教固守論と老・仏批判が優位し，儒教の純粋性は保たれたとする。日本では，陽明学を含む明末思想の影響を受けて三教一致論を受容するが，中江藤樹は，仏・老の差別論から後には人倫日用の学（儒教）に立つ三教一致論を主張したことを明らかにする。

結論は，以上の所論を整理し，陽明学を継承・展開した三地域の諸思想の地域的特性と相互関連を概括する。

審　査　の　要　旨

王陽明の思想が，いわゆる陽明学として東アジア地域に広汎に受容され展開したことは周知の通りであるが，従来の陽明学研究は，主として各地域ないし国別になされており，思想展開の普遍性と特殊性の問題にはあまり留意されて来なかった。わけても，韓国学界では朱子学の研究が主流をなし，陽明学については関心が向けられることは稀であった。著者はこの反省に立ち，陽明学及びその展開の諸相を東アジア的視野のもとに究明し，更にそれらを比較論的に考察したもので，特に朝鮮半島地域の陽明学展開を重視し，三地域の関連思想を個別的に解明するとともに，比較の視点を明確に設定して陽明学の普遍性と地域的特殊性を明らかにしたことは，その方法と成果において内外学界に貢献するところ少なからぬものがあると認められる。

個々の研究内容としては，次の諸点が注目される。第一に，陽明思想を体系的に再構成し，特に彼の思想における本体重視の向外的・積極的側面と，工夫重視の向内的・消極的側面とを，陽明思想に内在する二つの重要な特質として闡明し，これを陽明以後の思想展開の主要な比較の視点とするとともに，従来の王学左派・右派という分類のイデオロギー的性格付けを克服したこと，第二に，陽明思想を，致良知論，万物一体論，人欲論，権道論，三教一致論という五つの思想様相に整理し，これらが東アジア三地域においてどのように展開したかを具体的に比較考察したこと，第三に，思想構造の特性ないし比較の視点が明確にされたため，各地域の個別思想が陽明学展開のうちにありながら個性的に解明されたこと，またそのため，論文全体がよく構成的に整理されて論述されていること，等々で，これらの諸点及びその論証内容，知見等は本論文における特に注目すべき学術的成果である。

他方，陽明思想それ自体にその傾向があったとはいえ，著者の個別思想理解及び用語には仏教ないしそれに近似する語句が用いられることがあって，厳密さを欠く点がみえること，形而上的思惟の地域的変容の解明において，宋学ないし新儒学の影響にも関心を持つべきこと，陽明思想の東漸には朱子学との関連も注意すべきこと，また，総じて各篇における比較論はやや平板で，陽明学展開を可能にした思想的土壌・背景等への関心も含め，更に展開の地域的特殊性と共通性の闡明が求められること，これらは著者の反省と今後の研究に俟つところである。

以上，これを要するに，本論文は多少の不備もあるが，全体として陽明学研究及び東アジア思想史研究に特色ある一歩を印したもので，学界に貢献するところが少なくないものと認められる。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。